

第9号(2009.03.02 配信)

日本の人口が、長い歴史の上で初めて減少に転じています。少子化とか高齢化という言葉や現象が社会問題になってきたのは、最近どころかもう十年あるいはそれ以上も前でした。2005年から実際に人口が減り始め、その速度もかなり急で、流れは止めようがなく、すでに「少子の時代」に入っています。

「合計特殊出生率」(注)という、ご存知の方が多いいはず。WID(女性と開発)、GAD(ジェンダーと開発)の話ではよく出る用語ですから。注記は文末に回しますが、俗っぽくいえば、一人の女性が出産した平均子ども数です。日本のあちらこちらで小学校が閉校や併合され、空いた教室が年々増えるお年寄りの施設や職業訓練など別の用途に使われています。子どもたちの元気な遊び声が近所で聞こえなくなると、寂しい話さえ日常化しています。未婚者、独身者が多く、このままいくと日本はどうなるか気掛かりですが、現実の流れで止めようがないからには、それに立ち向かう方策をしっかりと立てて実行するしかありません。

一方で、外国人の居住者がかなり増えています。近い将来、いや今でさえ、企業や工場で働く外国人が欠かせません。少子の時代が進めば、将来の労働人口は減る一方。60歳定年制を多少延ばしたところで、日本経済を発展的に支えていく人材は足りません。今日でも、特別の経緯とは言え、看護師さんや介護の現場で、インドネシアやフィリピンから来日した女性たちが歓迎されています。ご近所にもガイジンさんをよく見掛けます。私の隣家の奥さんはフィンランド人です。筋向かいにはアメリカ人一家が住んでいました。

つい先日、日本国内で結婚した夫妻の20人に一人は国際結婚、東京ではその倍の10人に一人という新聞記事を見ました。そんなに多いのかと驚きました。協力隊員経験者ならともかく、国内の新婚さんの話です。NPO 法人国際文化振興協会のデータバンクを見ると、詳細は2004年までの数字ですが、2000~04年の国際結婚比率がずっと5%前後、04年が最多の5.5%。なるほど記事とおりです。その率は徐々に増えているに違いありません。

在留外国人の内容は多様です。永住者が最多ですが、日本人の配偶者がそれに次ぎ、定住者、留学、家族滞在と続きます。彼らは私たちと同じ住民＝「生活者」です。「生活者としての外国人」ですから、安全・安心に暮らすには、私たちと同様の知恵も工夫も必要でしょう。短期滞在者や出稼ぎガイジンとは違います。私たちの社会の一員です。

有数のシンクタンクが論述した『少子化と労働市場改革』を読むと、外国人労働者の受け入れについて、「見逃してはならないのは、受け入れた外国人に対し、公正な処遇や社会との共生のための手段をいかに確保するかという「受け入れ後」の体制にかかわる議論である」と記された一節がありました。

その一環と考えますが、日本で社会の一員として健やかに暮らすには、日々どんな場面で、日本語を使ってどんなやりとりができればいいか、「これだけは適切な対応、表現が必要」という場面の具体案を、国の文化審議会国語分科会が練り始めているとのこと。遅きに失すると思わないでもないけれど、「生活者としての外国人」を対象に、日本語教育の目的・目標と内容を掘り下げていくそうです。「共生の手段」確保に前進の一步です。彼らにとって、日常使う日本語の体得は、健やかな生活に不可欠です。安全・安心の社会構築にもつながります。

検討中の具体案は、「健康・安全に暮らす」をはじめ、住まいの確保、消費活動、子育て・教育や、人とかわる、社会の一員となる等々の大分類ごとに、日々の場面を幾つもの中分類、さらに小分類に分け、地域のマナーを守る、近所付き合いをする、なども示されています。国の対応とはいえ、急務と心得て早くやってほしいものです。速成版を出して、必要に応じて徐々に改良していけばいいのですから。

こういう話になると、さすが青年海外協力隊！といたいところですが。

『ACTION』と題する現地語ハンドブックが、英語、スペイン語、フランス語の各版など6ヵ国語ですでに活用されています。協力隊員は途上諸国での「生活者」にほかなりません。任期が通常2年とはいえ、地域社会の一員として日々の活動と生活を進めていくのですから。日本の立場、日本人の常識も失ってはいけない大事なのですが、任期中にもっとも重要なのは、地域住民と一体となり、異文化の理解を深め、連帯と満足と成果を得ていくことでしょう。派遣国社会の「生活者」としてのアクションをこそ、という趣旨で、題名を決めたそうです。

開いて読みながら聞き及んだ話を簡略に紹介すると…。企画・文案作成・編集には、音楽隊員OBで協力隊調整員の経験者と日本語隊員OGでJICA専門家経験者が主軸となってあたり、各版とも構成は、『ACTION』の解説(使い方)に始まり、会話、スピーチ、日本紹介から成っています。主要部はもちろん「会話」です。現地語と日本語の対訳で、用語にとどまらず表現の仕方を詳しく多様に。目次は見開き2ページに見易く記し、着任 任地に到着 活動開始 日常の生活で、の順に小分類(見出し)が30を数えます。主要3語のほか、タイ語、ラオス語、ポルトガル語をすでに刊行し、内容は、その国ごとに地域や地名の違いを取り入れたほかは各版とも共通です。今後、全派遣国の現地語に広げていく計画といわれます。

どの現地語(英、西、仏を含む)もそれぞれの語学訓練アドバイザーの監修を受け、赴任する隊員の希望者に進呈している由。刊行は(社)青年海外協力協会(JOCA)です。

(3月2日記。国際サプロー)

<注> 合計特殊出生率:

その年の出生動向が今後も続いたときに、一人の女性が生涯に産むと想定される子どもの数。15歳から49歳までの女性の年齢別の出生率(出生数÷年齢別女性人口)を合計して算出する。人口を維持するには出生率が2.07を上回る必要がある。

日本では、1970年代前半までは2.1程度に安定していたが、75年に2.0を割り込み、以来低下傾向が続く。2005年に1.26まで落ち込んだが、景気の回復などで06年に1.32、07年には1.36に上昇した。経済、社会の動向に影響を受ける傾向が見られる。(『日経ヨクヨムファイル』08年8月号の記事を基に記述)